発行日:令和8年1月10日　　電話:0120-087-052

第八十四号

会報

浄土真宗

太陽の会

新年の御挨拶

慈光に包まれし新年お慶び申し上げます。蓮如聖人とも親交が深かったといわれる一休宗純禅師の歌に新年に詠まれたものがあります。「門松は冥土の旅の壱里塚　めでたくもありめでたくもなし」この歌では、人生を旅にたとえ、門松を飾る正月が来るたびに冥土が近づいている。正月はめでたいが、めでたいばかりではないという皮肉が込められています。年を重ねる毎に誕生日が来るのを良いようなを悪いような複雑な気持になる感じと似ているのかもしれません。「日々是新なれば日々是好日なり」と松下幸之助さんの著書にあります。人生は何度でもリスタートが出来る。どんなに苦しい日が続いても、朝が来れば、また新たな一歩を踏み出すことができるのです。過去にとらわれず、今までの失敗は成功への足場のようなものなのです。新しい年が始まる今日を気持ち良く迎え、新たな希望の年となりますよう心よりお祈り申し上げ本年最初のご挨拶にかえさせていただきます。

彼岸会

9月22日(月)午前10時より太陽の塔桜ケ丘三階本堂にて苅屋照影師を導師に秋季彼岸会を執り行いました。多くの皆さまにご参詣いただきました。このお彼岸の習慣は古く『日本後紀』に記載された年号からみても806年崇道天皇の時代に7日間の法要が行われたとあります。また、春分・秋分の日という表記は戦後からで、それまでは「春季・秋季皇霊祭」とされていました。お彼岸は、古来より大事にされてきた仏教行事なのです。

非売品　（宗）太陽の会　〒721-0945　福山市引野町南一丁目17番地32号

餅つき大会

太陽の会では毎年恒例の餅つき大会を12月6日㈯に快晴の中で皆様と共に開催いたしました。昨年同様多くのご参加をいただき、つきたてのお餅や豚汁等を振る舞い大変喜んでいただきました。餅つき体験も開催し、参加されたお子さまたちも元気よくお餅をついてくれました。機械ではなく杵と臼を使った餅つきを懐かしむお声も沢山いただきました。ご来場いただきました皆様におかれましては、たいへんありがとうございました。

お餅は本来、神道において神様が召し上がる食べ物とされ、お米やお酒と共に神様へのとても大切な御供え物として使われていました。鏡餅の由来も、この御供えのお餅からきています。そのお餅をおさがりとして頂くことによって、昨年一年の無病息災のお祝いをしつつ、尚、ご縁のある方々とともに、ご先祖や神様、仏様に感謝し、益々の健康を祈願するという意味を込めて、

餅つきは現代まで伝わっております。私たちも餅つき大会を通してつきたてのお餅を仏様にお供えし、そして皆さまへもお餅をお配りするというかたちで感謝と健康への祈りをお伝えさせていただいております。同時に、皆様につきましても、新年をお迎えされるにあたり、ご縁のある方々に感謝されつつ、ますます慶びの多い年になるようお祈り申し上げます。

合掌

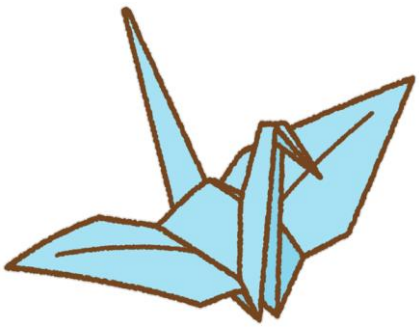
これからの行事

○本山(福山)
報恩講　一月十六日(金)
開式 十時～
春季彼岸会 三月二十一日(土)
開式 十時～
○川上太陽霊園(鹿児島)
春季彼岸会 三月八日(日)
開式 十時～
＊お経本や数珠は当会でも準備させていただいております。はじめてお参りの方もどうぞ気軽にお参りいただけたら幸いです。

僧侶のひとりごと

2025年も終わりましたが会員様におかれましては、どのような年になったでしょうか。昨年は、梅雨明けも早かったので猛暑日も長く続き10月の終わりまで30度近くの気温となり厳しい暑さに体力を奪われるような日々もありました。しかし、季節もめぐり冬になれば暖かい季節を待ち遠しいと思う今日この頃です。このようにないものねだり、移ろいやすい人の心をどうしようもなく思う事もあります。仏教では『諸行無常』すべてのものは無常であり永久に続くものなど何もないのです。愛する方とのお別れ、突然襲ってくる突然の不幸で心乱れる事もありますがそれは永遠に続くことはないのです。

悲しみや苦しみと同様に生きていれば喜びや楽しい事も訪れます。「火宅無常の世界は、よろずのこと皆もって、そらごと、たわごと、真実あることなし」と親鸞聖人は『歎異抄』の中でおっしゃっています。この世のものは全て、そらごと、たわごとのようなものです。変わらない真は一つもない。念仏のみが真実なのです。この世に生きる私たちは、変わり続ける不安な世界に生まれ、その中で幻のような安寧をつかもうと必死にもがきながら生きています。そんな私の人生であるからこそ、お念仏の教えに耳を傾け阿弥陀さまの慈悲に護られながら人生を歩める幸せに感謝し、無常の世をなもあみだぶつの功徳によって穏やかな心で日常を過ごしていくのです。



八月～十月のことば

太陽の会では、館内入口に「月のことば」を掲載させて頂いております。お経は難しいと思われる方もいらっしゃるとは思いますが、身近なやさしいお言葉として興味を持っていただき皆様のお心で味わって頂けたら幸いです。

【八月のことば】

仏さまにあいたい
これにまさる深い願いが
人間にあるでしょうか

「寺川俊昭」

私たちが法に出遭う事ができるのは、ブッダという存在があるからです。インド・中央アジアからもたらされた経典は、中国・日本の諸師たちが著した論疏をとおして、親鸞聖人は、阿弥陀如来のいつくしみの徳を聞くことを喜び感歎されています。それは、仏さまにあいたいという願いが、み教えを聞くよろこびに変わるのです。

【九月のことば】

大悲のなかに大悲のなかに
確かにこの私がいます

「外松大恵子」

「野に咲く小さな花が、私を人間に見てくれるなら、それは仏法に遇えたから」他者の立場から他者を思うことができるのは、仏法に出遭えたからなのです。大悲、大悲とは、阿弥陀如来のはたらきのことであり、すべてのいのちを隔てることなく包摂し、阿弥陀如来の本願のお心を示しています。私たちはどこまでも我欲にとらわれた、煩悩具足の愚かな存在ですが、それでも仏法を拠りどころにして少しでも仏さまのお心にかなう生き方を目指し、精一杯努力させていただき人間になるのです。

【十月のことば】

塵が塵のままに照らされて
ひかり輝いている

「西元宗助」

この法語は行き詰まり、どうにもならない苦悩の日々を過ごされたある朝。書斎の射し込む一条の光の中にたくさんの塵が浮遊しているのが見えて、その微塵の一つ一つが光に照らされて金色や銀色にひかり輝いていることに心打たれ、「この塵が私の姿」とお念仏されたそうです。阿弥陀さまは広大なお慈悲のはたらきで、すべての世界を照らしつくしてくださっています。阿弥陀さまの光明の一筋はひとりひとりが作る塵のように小さな世界に至り届き、なもあみだぶつが届いていると喚びかけてくださっているのです。そのことに気付かされた時の悦びはどれほどのものだったでしょうか。